

【最優秀賞】西野月さん（立教大学観光学部）

非体験者による伝承活動の意義—広島市の被爆体験伝承者活動を事例に—

<講評>本発表は、原爆を体験していない人物が、被爆体験の伝承者として活動するなかで、自らを「偽物」と感じるジレンマに着目し、事例考察と理論研究の両面から取り組んだものである。

事例研究からは、伝承者が被爆体験者との対話のなかで新たな語りを引き出していることや、伝承者自身のエピソードを含んだ語りが求められつつあることなどが指摘された。また理論研究からは、アルヴァックスとノラの、「記憶」に関する2つの概念を援用し、非体験者による体験継承の可能性を肯定的に論じている。

これら2つによって報告者は、この事象が、伝承者の心理的課題に加えてその社会的意義の点からも評価されるべきであると結論づけている。

事例分析と理論研究によって、問題の枠組み自体を拡張し、議論の可能性を新たなかたちで示した点は大変優れている。また観光の重要な要素の一つである伝承研究への視座の提示という点でも高く評価できると考えられる。

投票でも一般、学生ともに最も多数の支持を集めており、最優秀賞にふさわしいと委員会では判断した。

【優秀賞1】手塚有海（和歌山大学観光学部）

「ガチ中華」か「郷土料理」か—大阪・日本橋における中国料理へのまなざしと経験

<講評>

本報告は、大都市を中心にして中国人向けの中華料理店、いわゆる「ガチ中華」が増えており、さらにそれが一部の日本人にとって海外旅行気分を味わえる場所として人気を博している現象に着目し、大阪日本橋をフィールドとして、そこに向けられるまなざしや体験を調査分析したものである。

ネット上の口コミを収集したテキストマイニングや、店舗の地理的分布調査に加え、中国を故郷にもつ人、海外旅行経験のある日本人、海外未経験の日本人の3者から、ガチ中華店の印象をインタビューで集めるというユニークな方法で、「まなざし」や経験の多様性を明らかにした。

それらに基づき、中国人でも出身地によって店に対する感覚が異なること、日本人では海外旅行経験の有無によって感じ方が異なることなどを、明らかにした。

本研究は、複数の方法を用いて丁寧に調査分析がされている点、クリアな結果を示した点に加え、まなざし研究や観光アトラクションの生成に関する考察としても高く評価できる。投票でも2番目に多い得票を得ており、委員会では優秀賞にふさわしいと判断した。

【優秀賞2】中村悠人（立教大学観光学部）

被災地に千羽鶴を贈る行為の再検討

<講評>災害等の被災地への支援のあり方に関する災害支援に関する議論の一部として、千羽鶴など復興に直接役立たないものの寄贈がときに挙げられることがある。報告者はこの行為を対象とし、観光的な知見から考察を行った。まず、ぬいぐるみなどモノに旅をさせて、その所有者が楽しいという情動を喚起するモビリティ現象や、近年のファン行動論・推し活論といった現代的現象の構造をあらためて整理し、現代性と情動という災害復興論とはまったく異なる角度から千羽鶴の贈与行為を読み解いた点には、高いオリジナリティが認められる。得票数も高く、優秀賞に値する報告と判断した。

【優秀賞3】松本頼憲（和歌山大学観光学部）

学生ボランティアツアーリストの観光経験—インドネシアのノンフォーマル教育学校での国際協力活動を事例に

<講評>

本報告は、インドネシアのゴミ放棄地域となっている地区における教育支援活動に参加した日本人学生とインドネシア人学生の両者を対象に、ボランティアツーリズムがもたらす経験の多様性を論じたものである。

ボランティアツーリズムは人気の観光形態の一つである反面、批判も存在する。しかし報告者は、そうした議論が、実際に参加する観光者の経験をつまびらかにしていないとし、上記の活動の参加者へのインタビューを通じて参加者の多様な気づきや体験、それらに伴う認識の変容を具体的に示した。そしてボランティアツーリズムを、社会貢献対自己実現といった二項対立ではなく、むしろそれらが共存する現象として捉えるべきであると述べている。

本報告は、日本人ボランティアだけでなく現地側のボランティア学生の経験も示すことで、ボランティアツーリズム経験の多様性をクリアに示すことに成功している。得票数も多く、本委員会は、この報告が優秀賞に値すると判断した。